真説　長篠合戦の戦術

高校の教科書にも載っています長篠(ながしの)合戦は、勝利者の織田信長と敗者の武田勝頼のその後の両者の盛衰を決める歴史的な戦いと言われています。

長篠の位置は昔の三河国（愛知県東部）の北東部で遠江国（静岡県西部）に近い所です。

現在の愛知県新城(しんしろ)市です。

JR の豊橋から飯田線で北東に向かい三河東郷駅と長篠城駅の間の位置です。

この戦いでの戦術が注目され、織田信長と徳川家康連合軍の鉄砲攻撃が、武田勝頼軍の騎馬隊攻撃を圧倒した戦いと言われています。

この両者の戦術について５０年前に新説が出、現在それが従来説を覆す真説ではないかと言われています。

今回はこの真説（新説）について語ります。

その前に長篠合戦とは何であったのかを整理します。

武田信玄が三河（愛知県東部）・遠江（静岡県西部）支配の徳川家康を攻めていましたが、元亀４年（１５７３）４月陣中で病没します。

後は息子の勝頼が継ぎます。

家康は信玄の死後奪われていた三河の北部や遠江の東部の一部を取りも戻しますが、勝頼もそうはさせずと甲斐（山梨県）・信濃（長野県）から兵を派遣して闘争が続いていました。

勝頼は徳川家康の支配地区に攻勢をかけるため自ら兵１万５千人を率いて天正３年（１５７５）４月甲斐から出陣します。

三河のいくつかの城を落とした後４月２１日に奥三河（遠江に近い三河の北東地点）の長篠城を攻囲します。

後掲の長篠城略図と設楽原対陣図を参照ください。

この城はこの地区では両者にとって重要拠点でその時は家康が確保しており、守備隊長の城主にはこの地の豪族の奥平信昌（おくだいらのぶまさ）が任じられていました。

この長篠城の攻防をめぐる戦いが長篠合戦となるのです。

北から流れて長篠城では南側を流れる寒狭（かんさ）川（滝沢川、現在名豊川)、西から東へ流れる大野川（三輪川、現在名宇連（うれ）川）とが直角に合流して豊川となるその角地の台地にあります。渓谷のような川で、したがって城は南と東側は天然の濠となっています。西側も規模は両川ほどではありませんが川が濠となっています。

天然の要害の地に城があります。

先ず武田勝頼軍の長篠城攻撃についてです。

奥平信昌以下守備兵は５００人です。

勝頼は１万５千の兵で攻囲して何度も総攻撃をかけますが、落ちません。

家康は浜松城と岡崎城を拠点に８千人の軍勢ですが救援には兵員が足りません。同盟の織田信長に援軍を求めます。

その頃信長は浅井・越前の朝倉を滅ぼし、１５代将軍足利義昭を京より追放し、近畿での抵抗勢力は大坂の本願寺だけです。

本願寺はなかなか落ちません。

ここで家康からの援軍要請です。

同盟の家康の三河、遠江は、対武田対抗の上からも信長にとっても重要地帯です。

信長は本願寺攻勢を一段落させ長篠城救援に向かいます。

岐阜を天正３年（１５７５）５月１３日に出発し、１５日に家康の居城岡崎城（三河）で徳川軍と合流し、１８日長篠城の西の５キロメートルの地点極楽寺山を本陣とします。

この頃勝頼は長篠城の北の医王寺に本陣として城を囲んでいました。４月２１日以来何度も攻撃をかけても落ちません。

そこで信長の出陣を知りました。

ここで軍議が開かれました。

内容は定かでありません。ここでは江戸時代初めに書かれた武田の旧家臣の軍学書「甲陽軍鑑」によります。

信長が出陣して来るかどうかは勝頼は遠征以来疑心暗鬼でした。

大坂本願寺でてこずって出てこれないとの見方もしていました。しかし出陣してきました。

古老の侍大将の馬場信春と山縣昌景が、相手は多勢ここは甲州へ帰陣か、二案として長篠城を奪取して長陣すれば信長は帰陣するだろう。

そして直ぐに甲州への帰陣が最良と提案しました。

それに対して勝頼の側近の臣長坂長閑（ながさかちょうかん）と跡部大炊助（あとべおおいのすけ）が決戦を提案しました。

勝頼は決戦選びました。側近の二人は勝頼の意志を忖度したものと言えます。

織田（３万人）・徳川（８千人）連合軍（３万８千人）対し武田軍１，５万人と言われますが、はっきりはしません。しかし兵の数が連合軍が２倍以上はあったでしょう。

通常野戦では相手が２倍以上ある時は正面衝突の戦いは避けるのが普通です。

古老の大将の案が正論です。

何故勝頼は寡兵で野戦（野原での戦い）での正面攻撃を選んだのか分かりません。

後世の推論です。野戦での武田軍の強さに過信（騎馬隊攻撃）か、又ここで勝って信玄以来の古老の重臣に自分の強さを見せつけ権力の自分への集中を計りたかったとも。

ここでご存じの方も多い鳥居強右衛門（とりいすねうえもん）の登場です。

長篠城では４月２１日から籠城して抗戦中です。食料が乏しくなりました。

包囲されていますので城外との連絡が取れません。家康・信長が救援に来てくれているか分かりません。城主奥平信昌は家康に援軍要請の使者を送ることにします。使者は鳥居強右衛門（とりいすねうえもん）が名乗り出ます・

強右衛門は５月１５日武田軍の包囲網をかいくぐり岡崎城で家康に会い、家康から「信長も到着している」。信長よりも「まもなく長篠城に救援に向かう」との言辞を得ました。

しかし強右衛門長篠城に戻る途中で武田軍に捕まります。

武田軍より強右衛門に対し、城に向かって「{信長は来ない}と言え、そうすれば命を助け恩賞を取らせる」と誘います。強右衛門は同意します。

しかし実際には城の前に来て「信長は３日の内に着陣する」と叫びます。

強右衛門は武田軍に磔の刑に処されました。

この忠義に後世もてはやされます。

後掲の「鳥居強右衛門逆磔の図」をご覧ください。逆さ磔にされた（頭が下）との説もありましたが、否定説が一般です。

ここで長篠合戦が始まります。

後掲の設楽原(しだらがはら)対陣図をご覧ください。

この戦いは長篠・設楽原(しだらがはら)の戦い、あるいは設楽原の戦いとも言われ、場所名はあるみ原であることから、正確にはあるみ原の戦いの名称が正しいとの説もありますが、ここでは長篠合戦と言います。

長篠城の西側４キロメートル先で、東は信玄台地、西は弾正山台地でその間の平地で幅１００メートル位で戦線は南北２キロメートル位です。

間に小川のような連子(れんご)川（連吾川、幅３～５メートル）が流れています。連子川は南で長篠城方面から流れている豊川に流れ込みます。

長篠合戦は主戦場のあるみ原（設楽原）での戦いと長篠城周辺での戦いになります。

ここから長篠合戦の当日の５月２１日です。

信長は合戦前日の５月２０日の夜半に家康の家臣酒井忠次を隊長にして

兵４千人で、豊川の南側の山中を強行して長篠城を包囲している武田軍（長篠城の北側の武田陣地の鳶の巣砦に２千人、その他の包囲軍千人）を２１日午前８時ごろ急襲させます。

長篠城包囲の武田軍は敗戦して撤退し北の鳳来寺方向に逃げます。

長篠城は解放されます。

それ以前に勝頼本隊は長篠城の西側の寒狭(かんさ)川を超えて西に向かい有海台(あるみだい)を超えて２０日には連子川(れんごかわ)の東側、信玄台の西側に南北に陣をしきます。

勝頼は信玄台の才神を本陣とします。

信長は前日までに西側の弾正山台地のふもと、連子川の西側に南北２キロメートルにわたり馬防柵を設けます。三重柵と言われています。

ここに南北に陣を敷きます。

織田軍は北側、徳川軍は南側で分担します。

ここに午前１１時ごろ武田軍が突撃を仕掛けてきます。織田・徳川連合軍は基本的に馬防柵の内側からの鉄砲射撃で対戦します。

武田軍は連子川を越えて突撃して、ようやく柵にたどり着いても、又その前に鉄砲で撃たれて多くの死傷者を出し大損害を蒙ります。

両者これを繰り返し結局武田軍は鉄砲攻撃で大敗し、午後２時ごろ戦場から北に向かって逃げます。勝頼は開戦前にその朝、長篠城包囲軍が織田・徳川連合軍に敗れたことは分かっていたでしょう。

武田家の重臣馬場信春、山縣昌景、土屋昌統、内藤昌豊、原昌胤等信玄以来の大将・重臣が戦死します。兵１万人が討ち取られたと言われています（織田信長の家来太田牛一著の信長公記（しんちょうこうき）によるもののでですので少しオーバーか)。

どのようにして織田・信長連合軍は武田軍に大勝したか、その戦術は如何であったのかです。

従来の定説は「信長は馬防柵の背後に並べた三千挺の鉄砲を三段撃ちさせることによって武田の騎馬隊を撃破した」となります。

三段撃ちとは、射撃兵を横一列に三段に並べ段ごとに代わる代わる撃つことです。当時は火縄銃で弾や火薬の装てんに３０秒以上かかったことから、絶え間なく撃つために考え出された方法と言われました。

これは江戸時代の初めに出版された小瀬甫庵（おぜほあん）作の軍記もの「信長記（しんちょうき）」に記述された「鉄砲三千挺に‥‥・千挺づつ、放ちかけ、一段づつ立替り打たすべし」により江戸時代より今日まで定説になりました。

高校の教科書日本史Ｂ山川出版社では「鉄砲を大量に用いた戦法で騎馬隊を中心とする強敵武田勝頼の軍に大勝した」と記述されています。

要するに「騎馬兵中心とする個別戦闘より徒歩火兵による集団戦に切り替わった戦術革命があった。」との説です。

ここで近年の戦国史研究家がこの定説に異議を唱えます。藤本正行氏や鈴木昌哉氏等が有名です。

反対者の意見をまとめます。

〇鉄砲三段撃ちはない。

横三列２キロメートルにわたり一列ごとの代わる代わる一斉射撃は相当訓練していても難しい。指揮官の撃ての号令が届かない。

武田軍は横一列の総攻撃ではなく隊を組んでの固まっての攻撃（人備え）を繰りかえし、織田・徳川連合軍はこれに応戦した。

連合軍の射撃兵は４人一組で代わる代わる撃った解釈するのが妥当。

〇武田軍の騎馬隊はない

この時代歩兵の集団攻撃で、騎馬隊の結成は記録にない。

騎馬侍は戦場までは騎馬、戦場の突撃で騎馬は少ない。敵の歩兵の鉄砲、弓の的になるから。

武田軍も指揮官の一部が騎馬で戦ったかもしれないが、騎馬隊での攻撃はない。

合戦屏風でも騎馬隊は描かれていない。

連合軍が馬防柵を築いたとある馬防の馬の意味は戦場での柵をそう呼ぶ。出馬の意味は戦場に出かける、納馬は戦場から帰る意味でいずれも馬そのものに意味をもたせていない。

〇鉄砲三千はない

小瀬甫庵の「信長記」では三千挺と記述。

太田牛一の「信長公記」では千挺と記述と三千挺と記述の二通りがある。

三千挺説は絶対ではなくなっている。

〇鉄砲の大量使用は長篠合戦以前からある

この合戦が鉄砲歩兵と騎馬隊との合戦で、鉄砲歩兵の勝ちとの判定は実際には武田の騎馬隊はなかったし、鉄砲の大量使用は以前からあり、この戦いが戦国時代の戦術の革命であったとはいえない。

それではなぜ織田・徳川連合軍は武田軍に大勝したのかです。

〇兵の数が圧倒的に織田・徳川連合軍が武田軍より多かった。

〇連合軍は川を前にして馬防柵による防衛ラインを構築

〇連合軍の大量の鉄砲の攻撃

〇武田軍は自軍の強さの過信で突撃の繰り返し。鉄砲への対策がない。

〇武田軍は突撃では自軍の鉄砲は使えない（当時の火縄銃は立ち止まって立って玉や玉薬を装填するので、突撃しながらでは使用しにくい）

〇勝頼は決戦の前に１万５千人の兵で長篠城（５００人）を落とせなかった。

鉄砲で撃たれることが分かっているのに勝頼は何故突撃を繰り返し敗れたのかです。

これは長篠城が連合軍に解放され、後方にも連合軍を背負い、前方の連合軍の突撃を繰り返さざるを得なかったのかもしれません。

しかし犠牲の多い突撃の戦法は過去も、当時も近代も取ります。

日露戦争の旅順攻撃で乃木希典大将がとった突撃の繰り返しで多大な犠牲を

しいられました。この戦いは日本は最終的に勝ちました。

長篠合戦での連合軍勝因は誰の説でも共通していることは兵の数の多さと大量の鉄砲攻撃です。

鉄砲隊と騎馬隊についての論争は従来説と新説で研究者の間で未だ続いています。

以上

２０２４年7月9日

梅　一声

参考資料

〇戦国戦記　長篠の戦　高柳光壽　１９６０年　春秋社

〇長篠の戦い　藤本正行　２０１０年　洋泉社

〇鉄砲隊と騎馬軍団　真説・長篠合戦　鈴木真哉　２００３年　洋泉社

〇長篠合戦と武田勝頼　平山優　２０１４年　吉川弘文館

〇長篠合戦　金子　拓　２０２３年　中央公論新社

〇信長公記　太田牛一　奥野高広・岩沢愿校註　１９６９年　角川書店

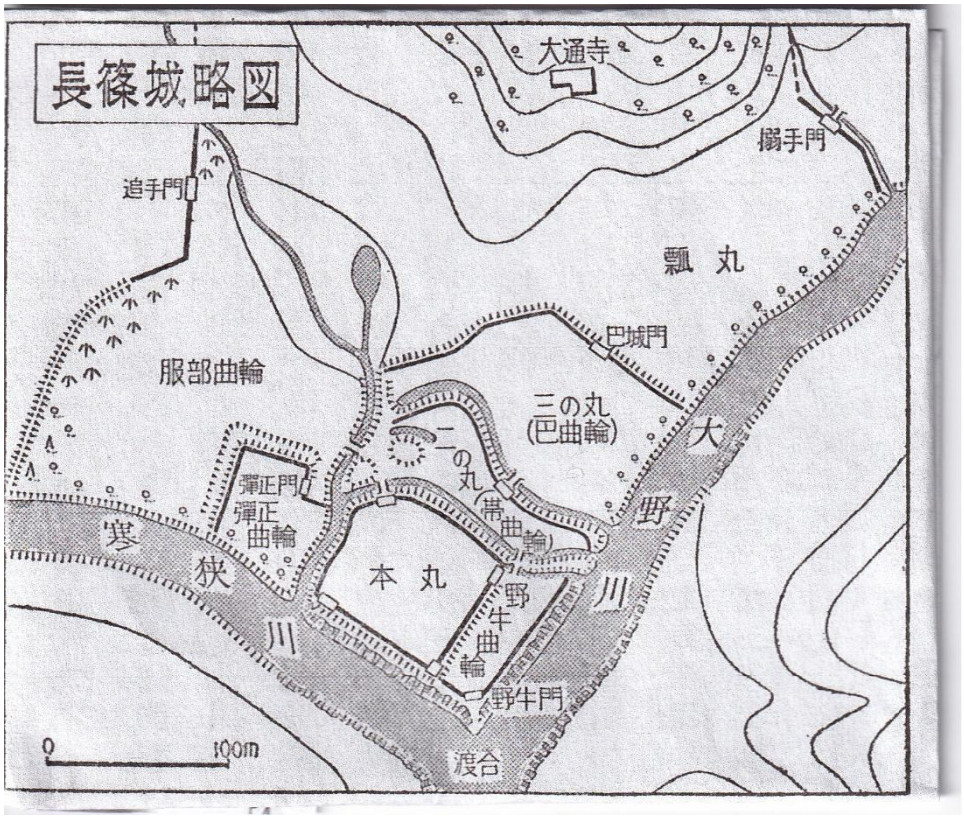
〇信長記　上・下　小瀬甫庵　神郡周　１９８１　現代思潮社

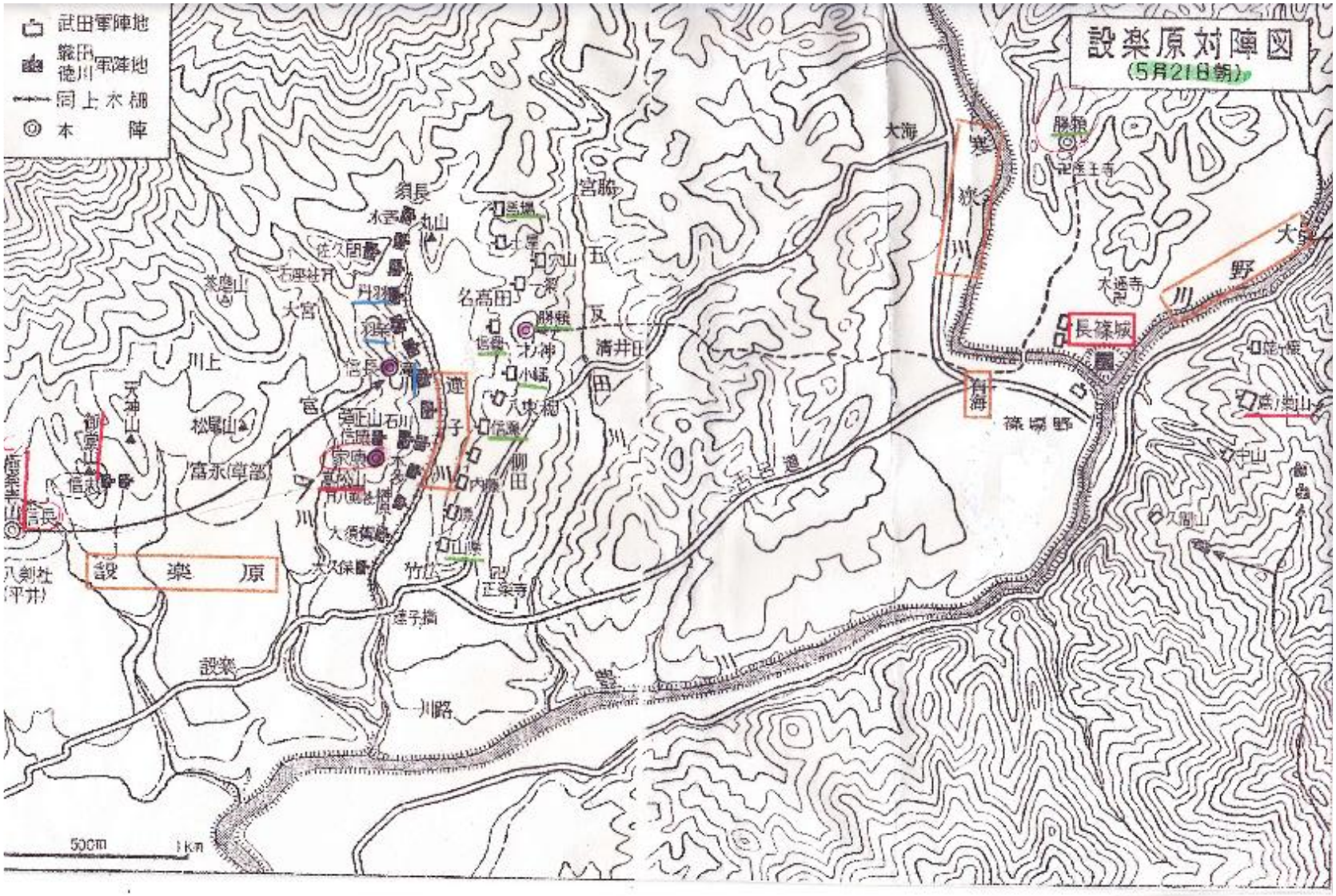
〇甲陽軍鑑　小幡景憲編纂　佐東正英校訂・訳　２００６年　筑摩書房

〇日本戦史　長篠役　参謀本部編　１９０３年　村田書店

〇早稲田大学エクステンションセンター　２０２４年度春講座

「文学と絵画から見た長篠合戦」資料　担当講師　堀新


長篠城略図
大通寺
搦手門
追手門
瓢丸
巴城門
服部曲輪
三の丸
(巴曲輪)
二の丸
(帯曲輪)
大野川
弾正門
弾正曲輪
寒狭川
本丸
野牛曲輪
野牛門
0
100m
渡合


設楽原対陣図
(5月21日朝)
武田軍陣地
織田徳川軍陣地
同上木柵
本陣
設楽原
長篠城
50cm
1km

長篠合戦図屏風（一部）　白帝文庫

縦一四五・〇×横一三三・〇　箱の蓋に「鳥居強右衛門逆磔之図」とあり

小島道裕「落合左平次道次背旗に描かれた磔刑像の向きについて」

馬防柵